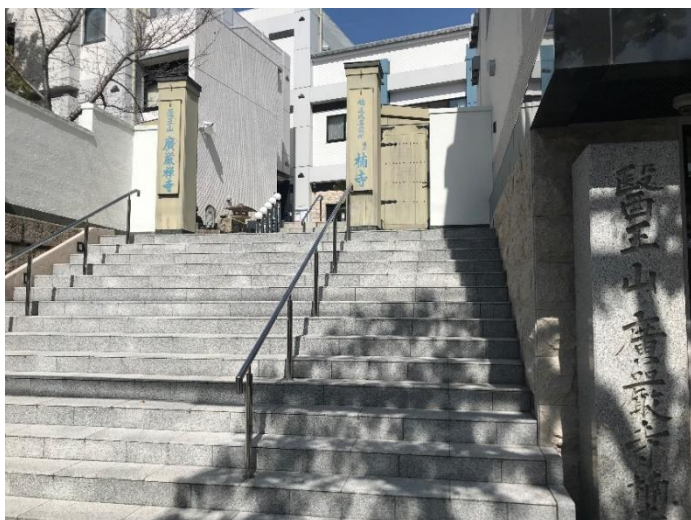


## 廣嚴寺（こうごんじ） 楠町7丁目



廣嚴寺は別名、楠寺とも言う。後醍醐天皇の勅願で1329(元徳1)年に開山し、開祖は元僧俊明極(しゅんみんき)和尚、本尊は薬師如来である。臨済宗南禅寺の末寺になり、正式には医王山廣嚴宝勝禅寺(いおうざんこうごんほうしょうぜんじ)と言う。創建当時は七堂伽藍が完備され、四丁にわたる寺域をほこっていたという。1336(建武3)年、楠木正成が湊川の

戦いを戦う前、この寺で禅問答をし大いに悟るところあって、戦いにのぞんだといわれている。一方、この寺は湊川の戦いの翌年、赤松範資が建立したのだと主張する説もある。

その後しばらく寺は荒廃するが、江戸時代延宝年間(1673~1680年)に、大和から千巖宗般(せんがんそうはん)がこの寺にきて再興することになる。この千巖は熱烈な楠木正成(大楠公)のファンで、現在の湊川神社にある大楠公の墓碑が建てられたのは、この千巖の努力によるところが大きい。すなわち、水戸藩主徳川光圀が大楠公の墓碑を建立する意志があることを聞き付けると、彼は早速江戸小石川の水戸藩上屋敷におもむき光圀に



南枝の梅

大楠公墓碑の建立の実行を促しているのである。その時千巖は70歳を越す老齢の身で、江戸と摂津の間を何度となく往復している。また、彼は備前岡山藩主の池田綱政が大楠公の子息正行の子孫であることを知り、江戸と岡山に綱政に会いに行き、墓碑建立の協力を要請している。その甲斐あって大楠公の墓碑は1692(元禄5)年に、徳川光圀の命によって完成したのである。なお、こうした千巖の功績をたたえ、今寺の境内には近衛文麿筆の「千巖禅師景仰碑」が建てられている。また、大楠公墓碑建立の際、墓碑を建てる場所に老梅があり、これをこの寺に移植したといわれ、それが境内にある「南枝の梅」である。なお、現在の梅は三代目で、水戸の常磐神社から贈られたもの(九代水戸藩主徳川齊昭(なりあき)寵愛の梅を接木したもの)である。



千巖禅師景仰碑

場所：神戸市中央区楠町7丁目3-2

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著